

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十六年四月廿五日印刷
昭和二十六年七月一日發行

第十七卷

第七號

浄土

七月號

凡愚浄土

吉田絃二郎

盆會のこころ

大野法道

お盆と魂祭り

中村康隆

「本眞尼」を放送して

村田嘉久子

1951

7

忘却と記憶

「忘却は記憶の母である」見聞したことを全部覚えて忘れずにいたのでは、風船をふくらまして遂に破ふいてしまうのと同じく、頭腦を破壊してしまふ。次々に忘れるからこそ、次々に新しいことが覚えられるのである。

最近の心理學では、下手に復習などをした時より、一度覚えたら、頭を休めるために睡眠をした時の方が、はるかによく覚えられろということ、實驗の上で證明している。記憶とはこのように、亂されずに整理されてあることなのである。

生きる上についても、何でもかんでもとり込んで自分のものにしたがる人は、結局何も得られぬことになつてしまふ。逆の一つのものを静かに着實に自分のものにして行く人は、ふりかえつてみればその得たところが極めて多い。「大欲は無欲に似たり」というけれども、得る結果からいうならば「無欲は大欲に似たり」でありたい。

焚く程は風がもて来る落葉かな

良寛

無欲恬淡のその俳句の中には、天地宇宙をわがものとしていゝる大欲が躍動している。

得ることは捨てることであるという逆に、「捨てることこそ得ることである」出家とは正にこのごとくに、一軒の家を出でて、三界を家とすることである。生活を捨棄することこそ眞の生活を抜きぬくことにもなる。

たゞ一すじの道を辿つて、懸命に精進すれば、ことは少なりといえ、その結果するところは大きい。

忘れよう。覚えるために。捨てよう。得るために。但し、あくまでも眞實に、その裏を得ることなしに。(竹中)

目次

「本眞尼」を放送して……………	村田嘉久子(19)
颯田本眞尼……………	藤吉慈海(22)
占　　ろ　　心……………	安居香山(12)
寛雅さんと一枚起請文……………	藤井實應(18)
凡　愚　淨　土……………	吉田絃二郎(1)
盆會のころ……………	大野法道(6)
吉田絃二郎先生を訪ねて……………	前田龍海(4)
七月のメモ……………	(5)(11)
凋　ま　ぬ　花……………	内山憲尙(8)
お盆と魂祭り……………	中村康隆(6)
芝園だより……………	



凡 愚 淨 土

吉 田 絃 二 郎

燈籠になき玉菊が来る夜かな

孟蘭盆會が近づくごとに思ひ出さるゝ句である。あろかなきかの夜半の微風に、ゆれるともなくゆれる盆燈籠の火影こそまことになつかしいものである。

ほんのりと淡彩の筆に描かれた秋草の繪も夢のやうな燈籠の火影を見つめて縁に端座すれば、遠い世界から立かへつて來るといふ父や母や妻たちのなつかしい姿も泛ぶ。

孟蘭盆の近づくごとに、佛教國日本に生まれたことをまことにありがたく思う。

うれしいのは草市の夜である。それも二三十年も前の草市の夜こそ、思い出してもなつかしい。アセチリンやランプの燭に照らされた草市の夜の情趣は、何となく昔めき、鄙びてゐてあわれでさへあつた。

佛を迎へるために秋草の花を求むれば、草の葉にはすでに露しとどなるもあはれである。

ませがき、草酸漿、玉蜀黍、茄子、胡瓜、苧殻……とさまざまの品をかゝへた女たちの、たまたま蟲をあきなふ男の前に立ちどまつて、蟲の音に聴き入る風情も、さすがに捨てがたい。

松虫、鈴虫、きりぎりす、かんたん、草ひばり、馬追ひの秋を誘ふて靜かなのは佛を迎へる草市の夜にふさわしいが、響虫の騒々しいのも秋の夜のわびしさを搔き立てゝあはれである。

かつては母と妻と三人で草市にゆき、また三人で迎へ火を焚いたが、やがて妻と二人で迎へ火を焚くようになり、今はわたくし一人で迎へ火を焚くようになつた。わたくしは孟蘭盆の季節を愛する。

盂蘭盆のころになれば紫陽花が咲き、朝顔が咲き、芙蓉が咲き、萩が咲く。桔梗が咲く。朝毎に露を宿す秋草に見入るばかりにも心は淨められ、しみじみと亡人々を懷ふ。

平常は俗事にかまけてあわただしい雑念に汚濁の生をむさぼつてゐるわたくしたちも、この季節になれば清淨澄徹の心境にをりて、悠久を想ひ、生死について考えるといふやうな特殊な人間になる。

迎へ火を焚く黄昏の一と時、送り火を焚く眞夜中の一と時、清淨心に徹したわたくしたち自身の姿こそ尊いものであらう。

その刹那こそ凡夫も菩薩になつてゐるであらう。

トルストイの童話にこんな物語りがある。

或るロシアの素朴な農夫が村の人たちとつれ立つて、エルサレムの御本山詣りに出かけて行つた。旅をかさねて歩いてゐる間に、或る小さな農村に通りがつた。暑い日で、ひどく咽喉が乾いたので、その農夫は道ばたの農家に立ち寄つて水を乞うた。さて水を飲んでから氣が付いたことであつたが、家の中には數人の家族が寝てゐる。

「この村に悪い病が流行してわたしの家でも一人残らず

病に取りつかれまして、大事な收穫もできず、たゞ死ぬのを待つてゐるばかりです」といふ主人の話であつた。

旅の農夫は氣の毒なことに思ひ、身錢を切つて藥を買ひ、家中の病人の食事の面倒を見てやつた。そして病人の看護の暇を見ては畑に出て、麥の收穫をはかつた。それがすむと畑をたがやして秋の收穫のために種子を播いてやつた。この旅の農夫の手あつい看護に、一家の人々は病からも救はれた。旅の農夫はいよいよ一家の人々に別れて、一人で御本山詣りの旅をつゞけようと考えたがかれのふところはもう幾らの金も残つてはゐなかつた。かれは御本山詣りを斷念して、ふたゝび故郷へかへつて行つた。

さて村の御本山詣りの人々は、かの一人の農夫が道草を食つておくれたのであらうくらゐに思つてゐたが、三日経ち、四日経ちしても追いついて來ないし一月、二月過ぎ、いよいよエルサレムの都にたどりついて、かの男の姿だけが見えないので、人々は彼の不運を氣の毒がつて、話し合つたことであつた。

ところが翌日の朝、一行の人々は待ちに待つたエルサレムの御本山にお詣りをして、自分たちの眼を疑はないではをられない奇蹟を見たのである。香煙にかゝるはる

かかなたの神聖な聖壇の上に、かの農夫が坐つてゐ、しかも農夫の肩のあたりから後光がさしてゐるのであつた。

村の人々はふたゝび長い旅をつゞけて故郷にかへて行つた。そして村に入つた時ふたゝび自分たちの眼を疑はざるを得ない奇蹟を見た。

かの質朴な農夫はぼろ／＼の服を着て野良仕事をやつてゐるのであつた。みんなが「お前さんはエルサレムの御本山でえらいところに座つてゐなさつたが……」と問うた時、かれは

「わしはエルサレムにはゆかなかつた」と答へたまゝ力をこめて鍬を打ち込んだ。

トルストイのこの話はきはめて東洋的な香をたゞへたものであり、凡夫淨土の觀念を、端的に物語つてゐるやうにも考へられる。

迷ひに迷ひ、呪ひに呪ひを重ねて一生を終るのがわたくしたち凡愚の一生である。

しかし名もないやうな雑草でも、一年に一度は美しい花を咲かせるやうに、凡夫も一年に一度或ひは一生に幾度かは菩薩の心にもなるであらう。そんな尊い機縁は何時、何處にもある。

ラスキンは「近代畫人論」の中に、夕暮れ誰れも氣付

かない時にも自然は美しい雲の色や麗しき雲の姿を見せてゐることを書いてゐる。そこにも見る人にとつては尊い機縁はある。

迎へ火を焚く夕暮の一と時でも、わたくしたちの心を菩薩心にかへらしたい。

本誌のみなさんに馴染の深かつた藤田寛雅さんが忽然として歿けられたことはたゞたゞ驚き悲しむの他はない。藤田さんは春秋に富み、徳と學才を兼ねそなへ最も將來を囑され、現在宗門に於いても大學に於いてもなくてはならぬ人であつた。無欲恬憺哲人の風貌があつた。毎月わたくしを訪ねられて原稿を持つて行つて下さるのであつたが、數ヶ月前幼い令嬢が小兒癲痺を病まれたものの悲しみやうといつたら、はたの見る目もいたましかつた。わたくしは靜觀の哲學者マーカス・オウレリアスがその娘の病に身をもだへて悲しんだことを聯想したことであつた。母なきお二人の幼い令嬢のことを案じつゝ亡くなられたであらうことを想へば、今年の盂蘭盆は一しほさびしい。

芭蕉翁が壽貞尼の死を悼み伊賀の旅中さゞげた句をか

數ならぬ身となおもひそ玉まつり

吉田絃二郎先生を 訪ねて

前 田 龍 海

佐藤賢順先生と同行して、吉田絃二郎先生のお宅を、お邪魔した。本誌其他で文章を拜見するばかりであつたが、お目にかかれて大へん嬉しく思つた。文面で以つてあれこれと心に畫いていた先生とお家の様子が大體その通りであつたのも嬉しかった。

○街道から少しひつこんで門がある、左の門柱に、法然上人讃仰會という札が認められる。戦争中、一寸懸られたものだが、先生は、「あれは外すのを忘れましてねーなかには、あれを見て、尋ねてくる人もありますよ」と語つておら

れたが、いつまでも靜かに、そのままであらう。

○門を入ると打水のしてある飛び石に導かれて、右折左折して玄關に立つと、ほうくと山鳩の聲がした、庭は相當深いらしい。

○大きな自然石の靴脱に氣を引かれたながら應接間に入る。四國遍路の折の傘、御手練の弓矢のケース、洋書棚へ庭一面の青葉の光が流れ込んで美しい調度、モザイクの床が映えている。

○先生は赤坊のような色艶をもつた温顔で、慈眼がその奥に光つてゐる。神経痛のため左手が御不自由で、湯呑など右手を添へて用をたしておられる。歩行もそうであるが、散歩は一時間位はせられるとのこと。毎月本誌のために、この中から玉稿を頂く有難さを今更に痛感した。

○奥様の御回向のために廊下を渡ると、庭の紅葉の木々の向ふ一面に美事な孟宗の竹林が、すくくと生え茂つて、嵯峨邊のような感

じがした、秋は、さぞ、映じ合つて美しいことであらう。

○佛間は、奥様の居室であつたらしく思うが、御位牌の傍に御著書が、うす高く捧げられてある。知られるように先生の愛情は人の及ぶ所ではない。此間も讀者の一人が、奥様のお墓に参りたいといつて、多摩を探し、又修善寺まで尋ねていかれても、その人によく分らなくて問合せてこられたが、先生のこの崇高な愛は人を感動させずにはいられない。

○奥様のお墓は先生の「詩をうたはぬ詩人」の序にこう書いておられる。

伊豆の山の上の、かの女の墓のまはりには龍膽が咲いていた。温泉町の人たちの墓地から少し離れて、こんもりと繁つた赤松山の上にたゞ一基の塚である。……

時雨する日など、わたくしは時雨に濡れてゐる山上の墓を想ふて山を眺むることもあつた。或る時は霜を呼ぶ寒夜、八日ごろの月が

墓の山の端に懸かるのを見て愁然たることもあつた。すでに捨てられた山上の灰と思ふ人もあらうが、なかなか諦めがたいものがある、と。いつも、妻の靈など他界の人のような呼び方をされてゐない。妻と呼び身近かに常に共に、起き伏しされているからである。心中切なるものを覺えつつ讀經一禮して出る。

○出た廊下で此間泥棒の入つた話が佐藤先生から出ると、先生は、「いやや少しばかりの繪を持つていたのですが、私の家に入つたために、その人が刑務所にいるのだからと氣も休まりませんし、もらい下げてくれるようにしましたよ、私も知つてゐる青年で、いいこなのです、きつと環境が悪かつたのですね」と述懐された。人格から自然ににじみ出る言葉なのである。山鳩しきりと鳴くのを聞きつつ辭去した。

○訪問記を書くつもりでなく、たゞ御挨拶に上つたので、いつか改めて、その機會を得たいと思う。

勝鬘参り(七月一日)

勝鬘院は大阪四天王寺の末寺で、聖徳太子が勝鬘經を講ぜられた地と伝えられる。本尊は愛染明王で、その名の文字から、花街の人々及び染物屋の参詣多く、年々此日御開帳をする。かつては色々の催物などに賑わった。

榮西忌(七月五日)

臨濟宗の開祖榮西禪師の忌日(順徳天皇建保三年、西暦一二一五年)

禪師は備中(岡山縣)吉備津の生れ、幼小にして才智拔群、八才の時俱舍論の頌をよみ十一才にして出家。叡山にて修學の後、仁安三年四月と文治三年三月との兩度、宋に渡り臨濟の懷徹禪師に師事しこれを受け繼ぎ、歸つて武家の間に禪を弘め、建仁寺に道場を設けて大いに宗風を鼓吹した。晩年の著作「喫茶養生記」は、禪と茶道との兩極意を伝えるものとして今に珍重されている。

記主忌(七月六日)

浄土宗第三祖、記主(諱は良忠、號は然阿)の忌日。土御門天皇正治元年(西暦一一九九)

七月二十九日石州三隅莊に生る。父は京極圓尊。十三才入寺、十六才出家得度。各宗諸師を歴訪し、台、密、律、華嚴等を學ぶ。生國に歸りて多陀寺に住していたが、嘉祥二年三十八才の折、生佛法師來り、導いて鎮西の聖光房の門に行かして、侍すること一ヶ年、浄土の宗義を相承して辭去す。

爾來十年、中國地方を巡教した後、寶治二年五十才にして上洛、次いで東海及び關東を遊歴し、鎌倉に入り、悟眞寺(現在の光明寺)に住す。諸書を著わして大いに宗義を發揚す。弘安十年(西暦一二八七年)七月六日病を以つて鎌倉に寂す。

壽八十九、伏見天皇永仁元年七月、記主禪師と勅諡を得る。

七夕祭(陰歷七月七日夜)

天の河兩岸の牽牛と織女の二星の相會う

る。

日。中國の傳説では、もと此の二星は夫婦であつたが帝釋(北極星)の怒りにふれて別居を命ぜられ、年に一度だけ相會うことが許るされた。此夜かささぎ翼を擴げて天の河に橋をかけ、織女星がこれを渡るのであるが、若し雨が一粒でも降れば天の河に水が出て渡れ

あまの河あさ瀬ふむまに更る夜を
うらみてわたるかかささぎの橋 行能

かささぎのわたせる橋や七夕の
はねをならぶる契りなるらん 長雅

盆會のころ

大野 法道



盆は正月とくもに、日本の國民がこぞつて行ふ、年中行事の最も大きいものであります。

それが中元と結びついて、前半年の種々な整理——謝禮の贈答、慰勞の贈與などがあつたりして、巷は急に色めきわたり、人々の心は何となく和やかになります。

盆會（ぼんえ）は本來は七月十五日を中心とします、之は夏安居（げあんご）の終りの自恣と言われる休養日であり、今、都會では七月に多く行いますが、一月おくれの八月盆が最も多く、舊曆でやるところもあります。

お盆の法會は、寺では施餓鬼をつとめ、棚經にまわるが、民家では燈籠や岐阜提燈などを、椽先きにつり、佛壇に眞菰の棚を造つて、季節の野菜や果物などを供え、先祖のみたまを迎え、墓參をします。

盆まつり、魂まつりなど 言われるように、夏の夜空の涼風うけて、大勢が大きい輪をかいて踊る盆踊りの風情は、得も言われぬ楽しいものであります。

なごやかな心で、先祖のみ魂をお迎えして、供養をささげる事は、人として忘れてはならぬ大切なことであります。今自分が、こうしているのは全く先祖のおかげで現境は人によつて種々に異つて居り、得意もあれば失意もあり、順境、逆境、とても區別しきれるものではなく、種々の問題がそれからそれと起きて來て、日頃は人々の心にゆつくり休む暇もなく、駆け廻つて居りますが結局は好ましい環境を望む、意欲を本として生きているのであります。

先祖の心は私達を好きようにと思われるはたらきで一ぱいであります。私達が子孫を好きようにと思う一念と同じように、私達を念じて居られる先祖であります。

世間では都合のわるい事が起きたり、つぎ／＼に病人が続いたりすると、もしかしたら、先祖のたゞりではあるまいか、などと考える人がありますが、とんでもない事であります。勿體ないことであります。

人の親として、またその前の親として、わが子を、わが孫を、兄弟姉妹、夫妻縁者、知己朋友を、わるいようにしむける心が、どこにあるものですか、そのような事は、斷じてあるものではありません。

それどころでなく、關係のあつた時は、種々の條件のために、思うようにできなかつたが、他界して佛のみ國にゆかれた先祖のみたまが、子孫を思いたまう念願は、何の制限もなく全く自由でありますから、それを感じ受ける私達の心には、力となつて映りであるのであります。先祖の恩義を感謝して、供養をさへげる盆會のころはこゝにあるのであります。

この先祖の尊い心をおし廣げてゆくと、佛さまの大慈悲心に、抱かれています我が身であることがわかります。こゝに大とは、誰れ彼れの區別なく、一切衆生を平等に眞の幸禮に導きたまう佛心だからであります。たゞわけもなく大きいものがあるのではなく、人間について言えば、その人の先祖なり、親なり、子なり……を通じて顯われたまう佛心であります。

人々が直接に感觸する種々のものは勿論のこと、間接のものにまで幸福に導く手をさしのべたまうみ佛であります。

觀無量壽經に、佛の光明の中に、百萬億那由他恒河沙

の應化佛が現われる、と説いてあるのは、こうしたころであると思います。そこで人々の先祖の尊い心は、つまり佛界に生れて佛心に生き、人々の子孫に向つて居られるのであります。

戦後には、人々の心の據點が定められぬから、道義が失われがちだと言われます。本當に敗戦直後はそれがひどく、此頃は大分よくなつたように見えるが、實は一層深刻になつたとも言えます。新聞記事に載るだけでも、自殺、他殺、母子心中というような悲しい慘事が、何と多いことでしょうか。これらはつまり、人間自己を忘れることから来るものと思われれます。人の命の尊とさを、それ程に感じないためでしょう。何よりも哀れな事は、受け得たる人生の尊さの知覺を失う事であります。

世間の種々の出来事は、單に他人の事ではなく、同じ社會に住む者として、わが身に全く關係がないとは言われません。悲惨極まる事を聞いて、心は密かにいたむものであり、いよ／＼反省のおろそかにできない事を思うのであります。

お盆の機會に、先祖を思い、そのみ魂をお迎えする心から、人間自己を、確實に知覺する道に進みゆくことがいかに意義あることであるかは、言うまでもないのであります。

童話

凋

ま

ぬ

花



内 山 憲 尙

むかし、印度に一人のお婆さんが居りました。このお婆さんは早く夫に別れて、たつた一人の男の子を大切にそだてゝいました。

男の子は小さい時にはあまり身體が丈夫でなかつたので、よく病氣をしました。そのたびに醫者よ薬よと夜も寝ないで介抱をして、どんなに心配をしたことでしよう。八つ九つになりました、やつと身體も普通になつて病氣の心配はなくなりました。

今度は先生につけて勉強をさせることになりました。

男の子も、三つの時にお父さんに分れて、お父さんの顔もよく覚えて居りませんので、たつた一人のお母さんを大變にしたつて、お母さんによくなつきました。やがて十一歳になり十三歳になつて、勉強の方も一人前までに進んで参りました。

年とつたお母さんは、息子の大きくなるのをたのしみにして、指折り數えて、『もう四五年もすれば、商賣をさせてやろう』『もう六七年もすればお嫁さんをもらつてやろう、そうしたら私も樂が出来ると云うものだ……』息子の大きくなるのをたゞ一つのたのしみに暮していました。

息子が十三歳になつた秋のことでした。一寸した風邪にかゝつたのがもとで二日床についた切りで死んでしまいました。

年とつたお母さんはどんなになげいたことでしよう。死んだ息子の枕もとで聲を立て、泣き續けるのでした。近所の人たちが、なぐさめてくれる言葉など耳にも入りません。たゞ泣いているばかりです。

親戚の人や近所の人たちが寄つて來て、お葬式をすま

せて、お墓に納めてやりました。

お婆さんは、今度はお墓の前へ坐つた切りで、毎日御飯もたべずに泣いています。

二日も三日もなんにもたべずに、頭をお墓の土にすりつけて、聲もかかれてしまつています。

「どうして死んだの。私は、お前一人をたよりにして生きて來たんです。お前が死んだら、私も一緒に死んでしまふ方がましです……。こんなに年をとつて何のたのしみがありましたよう……。私はこのまゝお前のお墓の前で死んでしまひます……」

誰が何んと云つても耳に入るところではありません、たゞ狂人の様になつて泣き叫んでいるばかりで、手のつけようありません。

二

恰度そこをお通りがゝりになつたのは、お釋迦様です

「どうしましたか……」

とやさしくおたづねになりました。お婆さんが顔をあげて見ますと、お釋迦様ですから軽くお辭儀をしました。

「どうして泣いているのです」

「お釋迦様、まあ、お聞き下さいませ。世の中に私ほど不仕合せのものがあつてしようか。若い時に、夫に死にわかれまして、たつた一人残つた男の子を、大切に

大切に、そだてて参りました。その子供がやつと大きくなつて、一人前の頃になりましたら、ほんの一日か二日の病氣で死んでしまいました。私はもう世の中に何のたのしみもありません、死んでしまひたいのです……」

「それは氣の毒なことですね……。あなたはどうしても息子さんの死をあきらめられませんか……」

「あきらめられるのですか、誰が何と云つても……」
「人は一度は死ぬものです、早く死ぬか、年をとつて死ぬかと云ふことはその人の持つて生れた生命です……」
「いやです、いやです……そんなことはありません……」
「そうですか、よろしい。それでは、あなたは、息子さんが最一度返つてくることを望みますか」

お婆さんは、急に顔をあげて、お釋迦様を見つめました
「息子が生き返る……もしも、出来れば、是非お願いいたします」

「よろしい、それでは生き返らせてあげましょう……」
お婆さんは、お釋迦様の足もとにち寄りしました。

「ありがとうございます。どうぞお願いいたします」

「たゞし、それにはお約束があります」

「どんな約束ですか」

「それは、いままでに一人も死人を出していない家のお線香を貰つて來ることです。そのお線香が手に入つたら、あなたの息子さんを生き返らせてあげましょう」

お婆さんはよろこんで、

「はいそれでは、これから一人も死人を出していない

お家のお線香を貰つて参りましょう……」

と大急ぎで出かけて行きました。

三

お婆さんは町へ行つて片づけばしから、聞いて歩きま

した。

「お宅には今まで死人を出さなかつたですか」

「いや昨日母がなくなりました」

又次の家へ行つて

「お宅では今まで死人を出しませんでしたか」

「この間たつた一人の子供をなくしました」

次から次へと數十軒の家を廻りましたが、死人のない家と云うのは一軒ありません。中には、自分と同じような身の上の人もありました。

いま、たつた一人の息子をなくして、自分は病氣で寝ていると云う、氣の毒な人もありました。

お婆さんは、約束をした線香が手に入らず、しよんぼりとお釋迦様のところへ歸つて参りました。

四

「どうです、死人を出していない家のお線香が手に入

りましたか」

「いゝえ、五六十軒もまわりましたが、死人を出さなかつたと云う家は一軒もございません」

お釋迦様は落ちついた言葉で申されました。

「そうでしょう、生れると云うことは死ぬことです、

どこの世界にいつまでも死なないで三百年も四百年も生きてゐる人がありましようか。咲いた花ならいつかは凋みます。……あなたの、せつない氣持はわかりますが、いくらあなたが泣いたからと云つて、息子さんは生き返つてくるものではありません。なくなつた息子さんのために供養をしてあげることが、あなたの大切なおつとめです……」

このお言葉をじつと聞いて居た、お婆さんは、お釋迦様の前に両手をつかえて

「わかりました、ありがとうございます。私は自分だけのかなしみで、自分の考を間違えていました。これからは、なくなつた息子の供養をしてやります……」

「よくわかつてくれました。ありがとうございます、それでは身體を大切にして下さい……」

お釋迦様は静かにお歩きになりました。お婆さんは掌を合わせて、お釋迦様の後姿をおがんでいました。

秋の夕焼が美しく、西の空を色どつていました。

(この稿を藤田寛雅兄の靈に捧ぐ)

四萬六千日 (七月十日)

此日佛菩薩に參詣すれば、平素の四萬六千日參る功德に相當すると傳えられる。東京では淺草の觀音、京都では清水寺及び愛宕山が有名である。淺草寺では境内にはおづきを賣る店多く出でるため、別名「はおづき市」ともいわれる。また土産に唐黍を買つて歸つてしまつておくと、雷除けになるともいわれる。

山門に雨やまず四萬六千日

涼しさや四萬六千日の鐘

夕浪
渡川

うら盆會 (七月十三日—十六日)

うら盆とは、梵語のウランバナの漢字音、倒懸、即ちさかさに懸かるような苦しみの意。そして此苦しみを救うのが此法會である。

釋迦十六弟子の一人大目連は神通天眼を得これを以つて、亡父母をみるに、母は餓鬼道におち痛苦に悩む。驚いてこれに飯を供するに變じて火焰となりて、母食するを得ぬ。目連悲しみ泣きて釋尊に訴う。佛説いて曰く「汝の孝順の至誠も母の重要を救ひがたし。すべからく十方衆僧に、百味の飲食を供養し

て、その厄難を救え」と教えられる。目連教えに隨つてこれをなし、母を救い得て、この法を未來世一切の孝順の者のために殘こされんことを請うた。これがうら盆の起りであり、中國を経て日本に至り、今に盛んに行われるのである。

一名「魂まつり」といい十三日には菩提寺へ墓參し先祖の御魂をお迎えし、夕方門口に麻^マ柯^カを焚いて家内にお導きする迎え火とする。十六日の朝、更び送り火を焚いてお歸りを送る。律氣の家では此日寺まで送つて行く。この間先祖の御魂は家に止まつて、家族の者と共にあつて、その心づくしの供物をうける。またこの三日間には棚經僧が各家をまわる。そして一切が済んで十六日の夜、又は十七日の朝には、佛壇の飾りや供物を藁船にのせて河に流す。これを精靈流しという。

近年都會では商家デパートの中元賣出し、會社のボーナス、遊興地の盆踊り等と結びついて年中行事化して來てはいるものの、季節の感覺の豊かな、そして佛教的色彩の強い重要な行事となつてゐる。

とうろう流ともいい、河川に燈籠に灯をともして流し、精靈の追福を祈る行事である。關東から四國九州の海岸に多く行われ、東北では松島の瑞巖寺關西では宇治の萬福寺のが有名である。

これは台灣や中國本土にも多くみられる。所によつては月遅れの八月十六日に川施餓鬼又は海施餓鬼として行ふところもある。いづれも盆に因んでの精靈の冥福のためで、近年東京では、三月九日の江東地區の大戦災を因んで行ふようになつてゐる。

おえんまさま (七月十六日)

盆の十六日は簀入りとて、かつては年期奉公人の年に一度の解放日とされ、この日は、地獄の釜の蓋もあく日とて、すべての仕事を休んだものである。これに由つてか由らずか各所ではおえんまさまの縁日が行われ、諸人えんま堂に參拜する。えんまは梵語のヤマで、惡事遮止靜息の意。諸事を止めて靜かに反省するによく、東京では四谷の太宗寺のえんまが有名である。

流燈會 (七月十六日)

御佛にすがれどもえんま祭かな 臍齋

占 う 心

安 居 香 山

「當るも八卦、當らぬも八卦」と言ふ諺がある。占ひの非合理的事を嘲笑した言葉であらう。而も今日何と多くの近代文明人がこの「八卦」に自己の運命を托する事であらうか。

中國古代の王は、その殆んどの行動と龜の甲羅や獸骨を焼いた占ひに依つて決した。この占ひの結果は至上命令でさへあつた。彼等は絶對的に之を信じ、若し占ひと違つた結果が實際に出たとしても決して占ひそのものに罪を着せなかつた。寧ろその理由を他の何物かに求めようとした。占ひはそれ程絶對性を持つて居たのであり、彼等の運命はこの占ひの結果と共にあつたのである。

中國人が好んで言ふ「天命」がこの占ひと關係せしめられたとき「沒法子マイファツ子」と言つて諦める宿命論者となつて行つたのである。

こうした考察は兎も角として、今日吾々が未開原始民族と稱して居る古代の人々と、原子科學を驅使して近代文明人と稱して居る吾々と、この占ひを通じてどれ程の變化があると言ふのであらうか。

今日吾々はリーダーに依つて目に見えぬ先のものを知つたり、天候を豫知したりする。古代人が天災の兆と恐れた日蝕等は、天文學

的數字を以て幾萬年の後の何分何秒に起ると言ふ事さへ出来る。思ひも依らぬわが肉體の中までが透き通る様に見える。

而もネオン輝く街角を曲つて、暗燈のかすかな光りの下で、簾竹をジャラつかす易者の前に立ち、當るとも當らぬとも分らぬこの神祕の力に頼ると言ふ事は何と言ふ事か。近代科學を以てしても古代人が用ひた占ひを驅除する事が出来ないとは、何と皮肉な事であらうか。

一體この「占う心」は人間の何處に根ざして居るのであらうか。そして古代人のそれと近代人のそれとに何の差もないのであらうか。こうした疑問に答へる爲には一度吾々は人間そのものを分析して見なければなるまい。

一體吾々は今日科學のお蔭により文化生活といふものを心行くまで味はつて居る。多くの勞力消費をまぬがれ、空想して居た事が夢の様に實現されて行く。これは古代人が思いもよらなかつた事である。

然し吾々はその反面何時も何と言ふ事のない不安におののいてゐる。

る。それは單に何時死ぬか分らぬと言ふ様な單純な恐怖からでなく何物かに恐迫され、追ひつめられた様な不安に驅られてゐる。そしてこの不安は科學の力では如何ともし難いものであり、逆にこの科學の進歩に比例する様に、人の心の中から涌き出る様な不安、更には他の如何なる人の力に依つてさへも如何ともする事の出來ぬ、唯私自身の、私の内から出て来る或る不安に追ひ立てられて居る。

特に今日の如く外的にも何もかもが混沌とし、何もかもが苦しい時にあつては尙更である。所詮人間は「山中の賊を破るに易く、心中の賊を破るは難い」様に、私の心の中に巢食ふ不安を拂ひ去る事は出來ない。そしてこの不安は人間の最も弱點とする所であり、「占う心」はこの様な弱點に根ざして、人類と共に今猶その生命を續けて居るのである。

果して古代の人々がこうした不安の故に占つたかは別として、數々の疑問や、決斷のし兼ねた迷い事をこの占ひに依つて決した事は確かである。占ふと言ふ事の起りは昔も今も同じ迷いの心から出たと言へよう。然し乍らその結果に對する態度は全く趣を異にしてゐる。

即ち古代人は占ひの結果を絶對なものとして信じ、又その通り行つた。彼等にとつては未知を知る爲の最高の手段として之を用ひその結果に對しては、吾々が今日科學の出す結果を信ずると同様に或はそれ以上に之を信じたのである。

吾々は最早や今日こうした占ひに替る手段としての科學を持つて居る筈である。而も尙且我々が非合理的な事を知り乍らこの占ひを用ひると言ふ事は、人間として持つ弱點に乗ぜられて居るのではあるまいか。

占ひには魔術性がある。「占う心」の魅力はこのマジックにある。迷ふ心にはこれがオアシスとなるからだ。人間の羣の様な知性はこの迷ふ心を如何ともする事が出來ない。

「占う心」はやがて「信ずる心」へと遷つて行く。そして近代人も又この「占ふ心」に誘はれて迷路にと進んで行く。弱點につけこまれた「信仰」はマジックにとりつかれた迷羊の心にも等しい。正信か邪信かはこの人間の弱點とマジック性とが結合するか否かによつて分れる。邪教がはびこるときは人がこの弱點を弱點と意識しないときである。

吾々は常に正しい信仰生活のもとによりよき生活を探求しようとしてゐる。然し果して教へるものも、教へられるものも、この人間の弱點につけ込んだり、つけ込まれたりしてゐる信仰でないかどうかを反省してみたい。

「占う心」。それはそのまゝ古代人にとつては「信ずる心」であつたとしても、少くも近代人にとつては全然區別されねばならぬ。これが混同されて居る信仰を持つ限り人間は永久に古代人と變ることはないであらう。

お盆と魂祭り

——歴史と民俗——

中村 康 隆

心にて顔に向ふや魂祭

鬼 貫

懐かしい愛情、悲しい想出、人々様々の泪と情念とをこめて亡き
み魂を祭るお盆——まことに人間の血潮もて奏づる一篇のうるわし
い抒情詩たる魂祭りの習俗。年毎につづつて來た繪卷、それを今改
めてのぞいてみよう。

どうしてこの月の魂祭りを盆というのだろうか。それをみ魂への供
物を容れる器である盆即ち盆（ボン、ボニ）からと解釋する人が、
昔も今もあるのだが、勿論、この言葉は、佛教の盂蘭盆會の略と見
るべきだらう。ウラボンは梵語のウランバナの音譯で、原語の意味
は、古來その行事の内容から推測してアバランバナ（倒懸——逆吊
し）の轉化した語でつまり救倒懸の意味だとされているが、近年高
楠博士はウルンバナ（救済、濟度）の訛つた語だらうと推定されて
いる。

*

印度人は、古來、祖先の祭りは子孫の義務であり、祖先への負債
だと考えた。そこで月々の新月祭をビンダ祖靈祭ともいふ、團子・

團飯・供餅の類を祖先に供える祭りを行つて來た。殊に印度曆の第
六月黒分十三日より三日間（陰曆六月末、即ち舊七月祖靈祭の前三
日）と、第十二月最終日（陰曆正月十五日）との二回には、マハー
ラヤと呼ぶ祖靈大祭を営んだものである。もしこの祖祭が怠られた
り行われぬ場合には、その祭られぬ祖靈は父祖の國（死者の世界）
で逆吊しのような苦みを受けると信じたのである。

このような民間信仰に對して、目連救母の故事因縁を説いて、救
倒懸の行事として自恣日（夏安居最終日の懺悔滅罪の集いの日）の
衆僧供養を勧めたのが、佛教の盂蘭盆會の儀規となつた。いわば、
民間のビンダ祖靈祭、就中マハラヤ祖靈年祭に對して、舊七月十五
日の僧院の自恣供養會を習合せしめたものといつてよい。盂蘭盆經
の成立は晚くも三世紀末葉と見られるから、その頃迄には、佛陀時
代から信者が善根功德を積むべく催おして來た自恣日の衆僧供養の
習わしを以て、佛徒の祖靈への追善行事とし、祖靈年祭の性格を持
つと強調するようになったと想われる。

しかし、この盂蘭盆會が發展したのは印度よりも寧ろ支那や日本

で、殊に日本で最も盛んになつたといつてよい。それには、それだけの理由がある。というのは、支那や日本では、舊七月十五日がもとと祖先のみ魂を迎えて行く大切な秋の收穫祭の日だつたと想われるからである。

＊

一體、支那でも日本でも朔日十五日には例月の祖祭が営まれるのが習わしだつたようである。今でも我が民俗に此の日をお日待としたり墓參の日とする風が残っているのは、その一證據であるが、支那でも宋史の岳飛傳に「朔望、祭りを其の家に設く」とあるように祖靈を祭る日としたのであつた。殊に季節の變り目の最初の満月の日には重要な季節的祖靈祭を営んだらしい。

漢の董仲舒の書いた春秋繁露を見ると、古は歳四祭で、四季の收穫物により先祖父母を祭るもので、春の祭を祠、夏を杓、秋を嘗、冬を蒸といひ、天子たるものは適時にお祭りをせねばならない、即ち正月に蕪、四月に麥、七月に黍稷、十月に初稻を以てするものでこれが天地の道理だ、とある。ところがこの四時の祭名は、禮記によると杓・禘・嘗・蒸であつたので、董仲舒はその禘を杓に間違えて、春祭りには本來祭りの舊稱である祠を當てていたので、既に漢代には夏祭りの禘の名稱に混亂があつたといふことは、後の三元説（北魏以降行われたという）に照し合せて興味深いものがある。

三元説はいわば右の四祭の夏祭りを除いた他の三祭を取り上げたものといえる。それは何れも各季節の最初の満月祭であつた。従つ

て孟秋七月の嘗も同様に十五日の満月祭であつたろう。そしてそれは丁度佛教の盂蘭盆會の日と一致するのである。禮記の月令篇孟秋の條に「是の月や農すなはち登穀す。天子新を嘗む。先づ寢廟に薦め、百官をして始めて收斂せしむ」とあるように、お盆の祭日は、支那では、元來が秋の新穀成熟を告げる大切な祖靈祭の日であつた。その上、支那にも祭られぬ靈は飢え苦しむという「鬼餒」の思想があるので、盂蘭盆會が容易に移植されたのも當然であつた。

＊

我が國でもお盆が正月と並び稱されるようになったには、それだけの素地——季節的民俗的な背景があつたのである。神祇令や延喜式のような古い書物にも六月と十二月とには月並祭つきなみのまつりが営まれ、その各晦日には大祓をする規定があるのは、それを區切りとして新しい半年の季節が始まることを示すと共に、民俗上その何れもの新しく迎える最初の満月の日に重要な祖靈祭が催されたるうことをも暗示する。なぜなら盆と正月との祭りの経過を見ると著しい一致があるからである。後になつて正月が年神の祭りとなつて先祖祭りであつたことが忘れられても、なお人々は今に盆暮寺への附屆け（祖靈供養料）を怠つていない。盂蘭盆の行事が今日の流行を見るに至つたのも、それが古い祖靈供養祭と複合したからに外ならない。齊明天皇の五年に詔して京内の諸寺にて盂蘭盆經を説かしめたのも七世の父母に報いしめるためであつたという。

ところが、お盆の我が國への流傳には、いま一つの注目すべき事

實があつた。それは盂蘭盆こそ灌佛會と並んで、最初に日本に受容
 れられた佛教行事であつたという點である。日本書紀を見ると、推
 古朝十四年に「初めて寺毎に四月八日、七月十五日に設齋す」とあ
 り、孝徳朝文化三年の制である冠位十三階の最下級の冠たる建武
 (初位または立身とも) について「此の冠は、大僧・饗客・
 四月七月の齋の時に著る所なり」と記し、齊明朝にも二回盂蘭盆の
 記事がある。宮廷に於けるこのような採用は、恐らくは民間の要請
 に應ずるものであろうし、それにはもと／＼この二つの月が民衆の
 生活暦にあつて特に重要な意味を持つたからであらう。二つの月は
 相共に佛教行事の興行を要求するに足る、相並んで大切なお祭り月
 であつたと考えられる。

そこで書紀を讀むと、天武・持統兩朝の記事の中に、例年のよう
 に使者を遣わして廣瀬の大忌神と龍田の風神とを祭つてゐるのを見
 出だす。他の祭りの記事が殆んどないのに比べて、これは相當に高
 く評價してよいと思う。神祇令や延喜式でもこの二つの祭りは大嘗
 祭や祈年・月次・神嘗・新嘗などの祭りに次ぐ主要な祭りとして四
 七兩月に行う規定とされているから、當時の民衆の生活暦にあつて
 必ずやこの兩月は同じ意味で重要視された祭り月であつたに違いな
 い。それは當然生産即ち農耕上の關連を持つていよう。というの
 は、廣瀬の祭神は若宇迦能賣命であるから若い穀靈の活動を祈るも
 のであり、龍田の風祭りも農耕の順調を祈る以外ではあり得ない。
 恐らくそれは麥や黍・粟・豆及び稻など五穀の順調な豊かな稔りを

祈るものであらう。

そして、五穀の豐穰を祈るべき孟夏と孟秋とのこの二つの祭り月
 の意識が、漸く農耕を主とするようになった當時の民俗に強かつた
 ことが、朝廷をして眞先に四月の灌佛と並んで七月の盆を取上げさ
 した主原因と解される。またそれなればこそ佛教が容易く民間に浸
 透し得たのもあつた。

こうして盂蘭盆會は、最初から農耕儀禮の要素と祖靈大祭の要素
 とを兼ねて、古い民俗と習合して受け容れられて來たのだつた。今
 日の盆習俗を見れば、この二つは一層明らかである。

＊

盆行事の殆んどが、亡きみ魂を迎え送りして供養するにあること
 は、いうまでもない。一日(釜蓋朔日、釜の口あき、石の戸)を燈
 籠立てという所(諏訪)もあるように、七月に入ると、寺ではもと
 は施餓鬼旗を立て、新盆の家では高燈籠(盆柱、燈籠柱、燈籠木竿)
 を立てた。そして月中立てたものである。土佐では六月晦日がトボ
 シゾメで七月晦日がトボシアゲであつた。東北のマツ焚きは一日か
 ら月中行つた。精霊迎えは墓から山からで、その爲に盆路作りとて
 墓路山路の草刈りもする。或は寺から盆供と引換えに經木塔婆を貰
 つて來るのを佛迎え(七日又十三日にする所も多い)と稱してもい
 る。

七日は今は七夕として星祭りと想われているが、これも盆月の
 半月祭であつた。普通は七日日、七日盆などといふ、此の日を盆始

めとする地方も多くなつたが、墓掃除や佛具等を洗い清めたりする日で磨き盆とも呼ばれる。秋田を始めこの日に迎え火を焚く處も多い。眠流し(ネプト、ネブタともいう)として知られる行事も、實は喪の祓いの習俗なのである。み魂の依代と考えられる盆花を迎える日は十一日であつたらしく、信州では花取日としている。床の間の生花の起りをこゝに求める人もある。こうした盆の準備の爲に町では盆市・花市も十二、三日頃開かれるようになつた。今の植木市の起りである。

十三日から十六日に亘る盆行事は殆んど佛事供養で、此の間にはまた無縁佛の供養をも行ふのが例である。施餓鬼會も、もとは新亡と無縁横死の靈を供養するにあつたようだ。家々の盆棚の外に無縁棚と荒棚(新盆棚のこと)とを家の外に設ける所もある。こうして一切精靈の供養をもして、十五日の夕には送り火を焚き、十六日には燈籠流し、棚流しを行つて、お送りする。盆行事は實はまだ終らない。送り盆はもとは十六日ではなかつた。二十日盆をウラ盆(末の盆の意味)という處もある。青森の三戸郡では人形焼きとて四五尺もある薬人形を此の日川の端などで焼いた。越後の南蒲原郡では

變食陀羅尼

お盆等最もよく用いられる陀羅尼であつて普通、ノームー、サラバー、タターギヤターバローキテー、オンサンバラ、サンバラ、ウンと稱えているが、原語通り讀むと、「ナマエ、養なえ」であつて、「サンブハラ」が、それに當る。「オーン」は庵で感嘆詞であるから

オーンサンブハラ、サンブハラ、フーン」で別段の意味は無いが、「正に其の如し」というあつて、意味は、「一切の如來なる觀音に歸命す、庵、養なえ、養なえ、庵」となる。總じて陀羅尼には歸命表白の文が必らずある。今オーンと同様の意となるのである。要するに前半は即ちそれで、主とする處は、「養なえ、養なえ」であつて、「サンブハラ」が、それに當る。「オーン」は庵で感嘆詞であるから

二十七日が裏盆だとした。しかし本來は下弦の半月祭が後の祭日だつたので、今も此の日を送り盆、終い盆と呼ぶ處もある。此の日は所謂地藏様の齋日で地藏盆が今に盛んである。

此等の一連の魂祭り行事の外に、盆祭りが秋の收穫祭であることば、その盆棚の飾りや供物に明かである。稻や粟の初穂を飾り、時の野菜や果物とか麵類を多く供え、贈物にも麵類が主に用いられる。水の實・水の子と稱して蓮や芋などの葉に胡瓜や茄子を細かく刻んで洗米をまぜたものが、魂棚や墓前の主な供え物とされる。眞に盆の魂祭りが、同時に祖靈を迎えての麥作畑作の收穫感謝祭であり、且つ稻粟其他秋の收穫祈願祭だつたことを、よく表わしている。胡瓜や茄子の牛馬も農耕儀禮の姿を示すものだ。

盆の祭は、かように東洋の農耕の民が秋の初めの満月祭を中心として行つて來た祖靈を迎えての收穫祭であつた。そして佛教はこの古い民俗の傳統を抹殺することなく代りに自らの精神を以て彩りをしたのであつた。それにとつても大文字山の夜の篝火などは、或る僧をして「山城の瓜と茄子をそのまゝに手向けになすぞ賀茂川の水」と詠ましめたに足る雄大な精神であつた。

寛我さんと 一枚起請文

藤井實應

ありません。最近になつて「浄土」への寄稿、「一枚起請文」の刊行について數度御ハガキを往復するこゝとなり、一度お目にかゝりたいものと念じながら遂にその機會もありませんでした、わづか三四度ハガキの往復をしたにすぎませんが、親しき同信として數十年來の友のやうに思ふていました。急逝を聞いて何とも哀悼に堪えません。

たします。(中略)廣い範圍の爲に極力實費頒布を行ひたいと努力して居ります。先般お心にかけて頂きました小生二女も幸ひ死線を超えました、が、未だに四肢不随にて臥床した儘すでに三ヶ月になります。之もお互にもつひとつの業と存じます。本年もよろしく御願します。」

この御ハガキの文によつても、如何に浄土誌のために、また「一枚起請文」刊行頒布に御努力下さつたことかゞうかゞはれます。

また御子さんの御病氣全癒を祈られつゝ、未だに臥床の子をあはれみつゝ、「これもお互にもつひとつの業と存ぜられます」といふ一句に心うたれ考えさせられたこととであります。

病める御子さんを残して健康であられたお父さんが先立たれたこともこの世の習いとはいゝながら、今更に諸行無常の教が身にしみ、人生の苦なることを痛感されます。

ます。寛我さんは身を以て無常の道理を示し、宿業ということをお示して下さまいした。

そして一枚起請文の刊行頒布に御盡力下さいましたことを思ひ、「只一向に念佛すべし」の祖訓に遵い、念佛精進せんことを念願し、謹んで御冥福をお祈り申します。

御禮

今回故藤田寛雅氏御母堂浪子刀自より、寛雅氏御葬儀の御香奠返しを擧げて本會のため寄附され、金一萬圓を頂きました。尊い御志を生かし、故人の遺志を守りたて本誌を此上とも向上させたいと存じます。ありがたく誌上御禮申し上げます。

法然上人鑽仰會

藤田寛雅さんが不時の事故で急逝されたと、五月上旬東京方面巡教の際聞きました。豫定された日程の爲、御悔みに御うかゞいもできませんでした。「浄土」五月號を本日拜讀していろいろの思ひが浮んで参ります。

寛雅さんの御尊父、寛隨上人には在京當時しばしばお目にかゝり、勝願寺の五重相傳の營まれました時——それは二十年前になりましたか——御手傳ひに参つたこともあります、その際寛雅さんにお目にかゝつたかどうか記憶が

頂いた御ハガキがある苦とさがつてみますと、この新春に頂いた御ハガキが見つかりました。これがおもえば最後に頂いたものでありました。

「新春御清祥慶祝至極に存じます。何時も何かと浄土に御配慮頂き感謝いたして居ります。一枚起請文の話は、正月、二月と「講讀」として連載と共にトラクト印刷に着手、三月彼岸施本を望んで準備いたすことになりましたので何卒勝手乍ら御關係筋におすゝめ頂きます様お願い

「本眞尼」を放送して

村田 嘉久子

NHKの「光を掲げた人々」(八十九回)に、堀江林五助氏作慈悲に生きた「蠟田本眞尼」が放送される事になり、私は其主人公「本眞尼」を演る事にきまりました。

實を申しますと「蠟田本眞尼」の御經歷を私は少しも存じませんでしたが、堀江先生の脚本を拜見しただけで大凡の事は解りました、非常によく書かれてありますのでそのまゝ素直に演らせて頂けばよろしいのですけれど、何か全然自分の知らない、而も世にもまれなる布施行者であつたという本眞尼の事を、もう少し深く知りたいと思ひました。AKから脚本を受取ると、すぐ私の得度の師願行寺の佐藤賢順師のもとへ馳けつけて教へを乞ひました。そして丁度幸いにも原作者の藤吉慈海師の「蠟田本眞尼」という御本を拜借する事が出来まして、未熟な私に取つて非常な幸せでございました。脚本中、私の解りかねていました

所、例えば、常不輕菩薩じょうぶきやうぼさつがどんな人にも、「汝まさに作佛すべきが故に」と言つて拜まれた、ということの意味をお話して頂いたり、虚假こけの念佛などという難しい文字には、一々フリ假名をつけて頂いたりしました。お念佛の唱え方についてもいろいろと御法意下さいました。それが私にとりまして、どれほど爲になつたことか、誠に有難いことでした。

さて稽古にかゝりまして、智山尼をなさる北林嬢、その他の若い弟子の尼僧を演る方達にまで、受賣りではございますが、文字の読み方の違いや、意味の解らない處などを御注意いたしまして、私は大へん面目を施しました。

けれどもさてセリフへ行つて見ますと、困つた事には私の頭と心がどうにも一致しないのです。それは藤吉慈海師の御本に依ると矢張り方言(三河吉田あたりの)を入れて

男のやうな朴訥な老尼を出したいと考へるのですが、堀江氏の脚本では八十何才かの淡々とした慈愛に満ちた老尼のよう感じられますし、どつちにした方がよいかと迷つてしまいました。處で演出を受持つておられるAKの伊藤氏の説としては、兎も角、あまり史實にこだわらず、まして早朝の放送でもあり、あまりお芝居にしない方がよい、すら／＼とした物語風に演りたい、という希望でしたので、私も方言などでなく、實際とは少々違ひましても八十何才かの布施行者「颯田本眞尼」を出したいものと只一生懸命に勤めました。

舞臺の上と違ひ扮装がありませんので、ことに異常の人物をそれらしくマイクを通して現はすという事は、中々むつかしく、一番苦心しましたのは、仕込杖を持つた壯士に脅迫されながらも、少しも驚かぬ本眞尼が、あべこべにその壯士に向つて六字分明のお念佛を勤める處でございませす。

「お念佛を申しなされ、お念佛を……」

と大きく言ひながら「南、無、阿、彌、陀、佛」と一字々々瞭りと唱へるので、普通只お念佛を唱へる時と違つて、非常にむづかしいのでございます。それは長年、始終御稱名を口の内ででも唱へられたであろう本眞尼の心から出る六字分明のお念佛でなければこの場合いけないからでございます。私はこゝの處が一當むづかしくて、體が固くなつ

てしまいました。と同時に、自分ながら本當に其處に阿彌陀如來の在しますが如く莊嚴な氣持になつた事でございませす。

優しいさとしをするような處ばかりですとどんなにか演りよいのですが、大きな聲で叱りつけた後すぐ優しい聲でお念佛をする……というやうな工合にして演りましたのでむづかしかつたのですが、幸い智山尼の北林嬢の物語風のセリフも非常によろしかつたので、お蔭で本眞尼の私も大變助かりまして、兎も角無事に放送を済ませました。作者の方からわざわざお傳言にて大變賞めて頂きまして、私も非常に嬉しうございました。

又師の佐藤先生からは、お念佛の處は大變よかつた、信仰の深い人でないとあれだけのお念佛は出ない、と賞めて頂きました。

今後の放送で何よりも一番私の有難く感じた事は、たとえ一時的にもせよ自分が「颯田本眞尼」になつた心持でございませす。藤吉師の原作を拜見すればするほど頭の下る氣持の深くなるこの老尼を、たとえ百分の一、十分の一でもマイクを通じて現したいと念じつゝある間に、知らず／＼に眼に見へない糸に引かれて行つて、自分が淨化されて行く感じがしたことでございます。それが本當に知らず／＼の間で、日常の起居すべてが淨化されて行くように感じました。

それこそ本眞尼のように、施物こそ出来ませんけれど、何か一つでも世の爲、人の爲に盡さなくては……という氣持になるのです。一寸した事にも電車の中で——今まででもそれは行つて居た事です——お年寄りや子供さんを連れた方達へ席を譲るとか、荷物を持つて上げるとか、今迄は自分が芝居の歸りなどで疲れ果てゝいる時など悪いと知りつゝそのまゝで居りましたのに今はそれは許されないような氣持になつてきました。疲れている時こそ、一そうそれを辛棒して、席を譲らなければいけないぞ……と本眞尼から叱られてゐるように感じるのです。

お念佛も、朝夕、佛壇の前に座つた時だけは申しましたけれど、唱へないと氣が済まないようになつたのも不思議でございます。

兎もあれ、「颯田本眞尼」放送中の三十分間、私はびつぱり汗をかきました。

セリフも少ないし、體を動かす譯ではないのに、どうしてこんなにも緊張するものか、本當に不思議な氣がしましたが、然し考えて見ますと、これだけの偉い尼僧をかりにもせよ現し出すという氣持だけで、平常より一そう緊張したものだと思ひます。

この稽古中、可笑しかつたのは、若い尼僧を演る若い女優さん達が、尼僧の平常がよく解らず、私に向つて

「尼さんつてどんな聲を出したらいいのでせうか」

と聞かれた事でございます。尼さんとして聲音が特別に變つてゐるわけでもないでせうから、私も返事に困りましたがふと思ひつきましたことは、鎌倉に住んで居りました時にも、又京都へ行つた時にも、東京にゐる時でも、若い尼僧さんと折々お話したことがありましたが、皆さんが誠に無邪氣な事でした。

「尼さんつて、初々しい娘さんというように見えますよ」と、私が申しましたら、其若い女優さん達も安心してセリフを言うようになりました。矢張、何か特別な聲でも出すように思つて居たのかと、ほゝ笑ましい氣がしました。

教學だより

○淨土宗教學院研究所では毎月、眞摯なる研究發表が行われているが、本年に入つては次の如くである。二月「華嚴經壽命品に於ける彌陀淨土に就て」香月乗花氏、三月「文化變遷と宗教概念」竹中信常氏、四月「ジヤイナ教に就て」松濤誠康氏、五月「指方立相の本質とその根據」服部英淳氏、六月「苦觀について」前田龍海氏。○本年度研究所主幹は佐藤賢順氏に代つて、松濤氏が就任した。○敎學院では發足以來、毎年秋、敎學大會を開催し、廣い意味での宗學發展に寄與するところ多大であるが、本年は東京で開かれる模様である。○鈴木大拙博士は長らく渡米していたが、最近、東大チベツト語講師多田等觀氏、又、同印哲助敎授中村元氏も、佛教を中心とした東洋思想を敎授する爲に赴く。

布 施 行 者

颯 田 本 眞 尼

藤 吉 慈 海

本眞尼の布施行はかくして始まつた。明治二十八年五月には山形縣酒田町の震災救助として私財百圓、手拭風呂敷等十八捆を罹災者千百戸へ施しの爲め、同地に赴き、その被害の甚大なるをみては、更に仙臺・東京の間を往復して救済につとめ、その歳はとうとう三河へ歸ることが出来なかつた。

そして又その翌年の六月には、宮城・岩手・青森の三縣下に亘る所謂三陸の海嘯に際し、その罹災者救恤のため東京の雲照律師はじめ東京名流夫人よりなる正法會員の代理として、衣類その他施與のものを持つて、親しく災害地を訪ね救恤につとめられた。その時、雲照律師より老尼へよせられた依頼狀は、律師自筆の「六波羅密」の扁額と共に今日も猶ほ德雲寺に保存せられてゐる。

この三陸の海嘯に、老尼のお共をして災害地へ赴かれた祥瑞尼はいま德雲寺にあつて澤山の尼僧様方と専修念佛に餘念が無いが、昭和十八年の夏私が同信の方々と共に德雲寺を訪ねたとき、ぼつくと次のやうな尊い追憶談をされるのであつた。

老師は私を連れて、稗や粟を喰べ、行乞しながら途を急がれました。途中、牛や馬をみると私を振返り、

「牛や馬をみたらな、おれが佛になつたら救つてやるだ、といふ願をおこして、南無阿彌陀佛と申して拜みや。今生に於いて結縁しておかないと、後になつて救はうと思つても、縁無き衆生は救へないことがあるでな。」と申されるのでした。

この一時を以てしても、老尼の施行が單なる社會事業のそれではなかつたことが窺はれるであらう。施しの結縁によつて、お淨土への旅の道連を一人でも多くつくりたいといふのが老尼生涯の念願であつた。しかもそれが單に人間のみに限らず、道で出あつた牛や馬にも深い宿縁を感じて、お念佛を申して通られた老尼こそは眞に大乘菩薩の道を歩いた人であつた。かうした施しの行脚が、明治二十四年の美濃の震災から大正十三年の藤澤町震災救恤まで三十四年間全く菩薩の悲願の行として續けられた。その足跡は全國二十三縣百五十餘ヶ町村に亘り、施物を施した戸數が六萬餘、勸化結縁された家が十萬餘戸に及んだといふことである。(黒野耕齋氏調査による)東北地方では青森・岩手・秋田・山形・宮城・福島の六縣に北海道を加え、東海道・中仙道では長野・神奈川・静岡・愛知・岐阜・三重の六縣。北陸地方では新潟・福井の二縣。中國筋では兵庫・鳥取・

廣島・島根の四縣。四國九州では徳島・佐賀・鹿兒島の三縣に亘つて、親しく災害地に赴き救恤につとめられたのである。しかもその施行は右の手のなすことを左の手に知らさざるが如く、全く陰徳の行として行はれ、老尼は自分の名前を出すことを特に好まれず、恰かも鳥が空を飛ぶやうに、つとめてその蹤跡を留めることを避けられた。したがつて僅かな記録に残るものの外、全く人に知られず、佛の密行にも比すべきこの大悲行がこの國の津々浦々の福田を耕すことになつたのである。

この三十四年間に施行行脚の無かつた年は僅か明治二十六・七年の二年だけで、他は明けても暮れても地震・海嘯・洪水・火事等苟しくも人の困つてゐる噂を聞くと、一直ぐに施物を持つて飛び出されるのがその日常であつた。その内で特に災害の範圍や程度の関係から、大きな施しのあつたのが、明治二十四年の美濃の震災・同二十八年の酒田の震災・二十九年の三陸の海嘯・四十年の函館の大火・四十三年の青森の大火・大正三年の櫻島の噴火等であつた。その施與の細數も多いときには二百七十餘行李に達してゐる。老尼の晩年特にその病臥前の七八年間は、實に施しの爲に席の暖まる暇が無かつた程である。即ち大正六年には三月に三重縣の阿漕・四月に秋田縣の能代・七月に新潟縣の黒條・出雲崎・上川西・十月に青森縣大鰐村・十二月には弘前市と引續いて起つた大火の跡を矢繼ぎ早に廻られた。このやうにして大正七年に六回・同十二年に四回・同十三年に一回・顯著なものだけでも前後總計七十餘回に及んでゐる。これらの施しの行は止むに止まれぬ老尼が信仰の閃きを外にしては全く他人から頼まれて出来ることではなかつた。

しかも、この老尼の人間業とも思へない大施行が、取り立てて言

ふべき何等の背景も無く、唯だ心から心への信者の隨喜と同行によつて、三十餘年間幾まず倦まず、五萬餘戸に布施行を遂げ得たことは、向後は知らず、おそらくは前代未聞の事例であらう。

しかし、この布施行は、文字通り密行密用的なものであつたため今日私共はお弟子様方の謙遜に物語られる追憶談と、老尼有縁の方々から寄せられた書翰の二三と、矢吹博士の書かれた鶴沼慈教庵より出てゐる「本眞老尼」なる小冊子によるの外、それ以上のことを知ることは出来ない。今は矢吹博士の冊子と多少の重複はあるが、左にその一部を記載して、老尼の布施行の眞風光に接することによよう。

私にとつては有縁の地である佐賀縣西松浦郡名護屋村馬渡島に七十四歳の老尼が尊い教化を垂れて下さつたことである。馬渡島は豊太閤の朝鮮征伐で名高い九州肥前名護屋の城趾から海上十哩程離れた玄海灘の一孤島で、二百戸たらずの村落に過ぎないが、大正七年一月三十日突然火災が起つて本家屋三十八戸納屋三十戸ほど見る間に焼失してしまつた。ことはまことに一些事に過ぎなかつた。しかし老尼は人知れぬ絶海の孤島に起つたこの火災に深く同情して、同年二月、多くは大阪方面で集められた施物を持つて親しく罹災地に赴かれた。左に同地馬渡小學校長彌富忠六先生の當時の追憶記から島民の感激の様子を摘記しよう。

……忘れもせぬ大きな梱が五個、それを持參して下さいました方が颯田御尊尼でありました。尊尼は身につける衣は木綿の質素なもの、御食事は豆腐もない島で味噌と澤庵許りで頂かれ、無理に麥飯を炊かせて午前九時と十一時と日に二回頂かれました。御話されることは實に御同情こもる御話で、これまで御説教など聞いた事のな

い島人も涙を流し、初めは手を合はせることも知らなかつたが、……知らず／＼手を合せ佛様の御慈悲の有難さも知りました。滞在四日にしてお歸りになりました。島人は黒山の如く港に集つて生佛御尊尼を送りました。送る人、送らるゝ人、共に手を合せてお念佛、感極つて女はすゝり泣きいたしました。船は岸を離れ、やがて帆を上げて沖へ／＼と走りましたが、玄海の浪は荒く船は今にもくつがへらんばかり、時々浪にかくれて船はみえず、島人はみな心を痛めて阜頭に立ち船が見えなくなるまで、御無事に呼子へ着かれるやうにと祈つていつまでも阜頭を離れませんでした。

その後老尼はこの島からの懇請で、又もこの荒浪を越えて前後三回に亘り教化と施行脚をしてゐられる。島人が老尼に御布施として若干のお金を差上げんとしたが、老尼はどうしても受取られなかつたので、その代りに、ふのりといひじきを差上げたら大變喜ばれて風呂敷に包んで背負つて歸られた。尙、この島の佛教徒六十八戸に對して京都から立派なお佛像を送られこの島の人達に佛様を拜むことを教へられた。この送られたお佛像の箱書を現清淨華院御法主石橋誠道上人なども手つだはれたさうである。

次は大正八年十二月、老尼が第二回目はこの島へ行かれた時の話である。

或日火鉢に對座して居りました區長が、小さな名も知れぬ虫の這つてゐるのを何氣なく拾つて火鉢の中へ入れようとしみますと、御尊尼は、それは可愛想だと言つてお念佛を唱えつゝ、其虫を縁の下へ放たれました。區長も罹災者なのでその蒲團の少いのを見られ、御尊尼は御歸りになつてすぐ蒲團を送つて下さつたそうです。島には霜やけの人が相當に居るのを御覽になつたと見えて霜

やけの藥までも澤山送つて下さいました。

大正九年四月第三回目の渡島の時は海上間切りといふ風が吹いて呼子から十哩の行程を殆ど十二時間も荒浪にもまれて、老尼も大變酔はれ、御顔色も無く船はたにておはきになつた。丁度同じ船に乗つておられた彌富校長が心配して背中をさすつたりされると老尼は精神はしつかりしてゐられて、

「つかまへないでよろしい。船がひつくりかへれば體はお魚に供養するのだから」

と申された。彌富先生も老尼の御慈悲の深さに今更乍ら感激せられるのであつた。その時の追憶記に

……老尼は、この島の全佛教徒に御佛像やお土産を與へて下さいました。學校職員區長等には御手製の財布、ハガキ入れ等を下さいました。「お珍らしいはがき入れ、」と御禮を申しますと、「そんなに禮言ふに及ばぬ、十銭しかないから」と申されました。其時も島人は夕方の仕事を早くやめて一人残らず生佛様の御説教を聴聞しては有難涙をこぼしました。島には小さい觀音堂があつて、そこに毀れた觀音様や地藏様、藥師様などの像がありましたので、御尊尼はこの三佛體の御修理をさせて頂きたいとて、その佛像を京都の小島佛具店へ送られました。其の年の秋立派に御修理の上御贈り下さいましたので九州より御僧を迎え盛大なる法事を営みました。

御歸りの時島人は又もう一度御出を願ふことは出来すまいかと申しますと、「この世のことはお約束されませんが、來世でお逢ひすることはお約束致します」

と語られ、澤山の島人に見送られ御乗船になり、今度は二時間半ばかりで、名護屋へつかれました……(つづく)

芝園だより

◎藤田氏亡き後の混亂もどうやら曲りなりにも落ちついて、暫定的乍ら方針も定まつた。

◎といつても、各人がより頑張りが合つて、藤田氏の残こした眞實を補填する以外には方法はないわけ。

◎六月四日の命日に集つての結果である。

◎それにしても、本誌が至寶と仰ぐ吉田絃二郎先生にも改めてのお願いをせねばならぬので、佐藤賢順氏を災わして、玉川のお宅にお伺いして頂いた。先生も昨今は大部御體が御不自由らしいとのこと。浄土のためにも一日も御健在あらんことを。

◎眞野先生も數旬來床上においでになつてゐるが、藤田氏追悼文を始めとして、口述乍ら玉稿を頂けるようになった。また、NHKのために行誼上人についての録音放送をされるなど、お元氣は日増し

に回復している。

◎今日は、これから増上寺に、石井教道先生の學位獲得祝賀會がある。浄土宗も多くの學者を失つたが、永い忍従の芽がふいて、どうやら更び昔の浄土宗の絢爛さをとり戻し得ることであろう。

◎今後、月一回、關係者が集つて前號の批判と、次號の編集プランを練ることとした。自己批判というとか何だか赤みたいだが、そのこと自體は決してそうではない。考えようによつては、佛教もまた自己批判から出發しているといえるのじやないだろうか。

◎諸賢もまた、浄土の自己批判のための材料を提供して頂きたい。

(六月九日、竹中)

◎ある日の編集會議。賢順密雄兩佐藤先生、いつになくそわ／＼と腰が落着かず、まあお坐りなさい、九月號はと、と云つて竹中氏會議進行に大童。あまり楽しそうなので、それと勘づいた竹中氏、會議スピーディに終了、揃つてお出か

け。名編集長。さて今から編集をやりますといつて始めたつて名案が浮ぶものでもない。これで終りましたといつて雑談になつてから案外よい企畫が生れることもある◎今、これから暑くなろうというのに我々は、そろ／＼寒くなる時の事を考へている。之が編集の姿である。浄土も、やゝ發行期日が常態に復したのも、關係者の努力が集中されて來たからである。

◎連載の藤吉慈海氏は、京都人文科學研究所員であるが戰後、初のインド留學する二名の中に選ばれました。

◎本誌執筆者は舊知の方は存じておられると思いますが、大野法道氏は文學博士、正大佛教學研究室主任、増上寺執事長である。村田女史は新劇俳優として重鎮であり、舞臺にマイクに活躍され、而も、佐藤賢順氏につき得度、加行せられ、僧籍もある方であります。内山氏は、兒童文學、保育について余りにも有名です。藤井師は布

教第一線の徳者であり、中村氏は正大宗教學助教授である。安居氏は、文理大・正大漢文學の、それ／＼助手、副手である。

◎本誌への御意見は、振替用紙裏の通信欄を御活用下さい。(前田)

入會費御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下さい。着次第御送本申上げます。

「浄土」 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年六月廿五日印刷
昭和廿六年七月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田保町三ノ十

發行所 法然上人鑽仰會
東京都港區芝公園五ノ一〇

振替東京 八二一八七番
會費番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共

大正大學教授

佐藤賢順著

信仰への導き

B五半截 十六頁
一部 七圓

近來ラヂオに講演に縦横の活動をつゞけられる著者が想を練り、思いを新たに、信仰の眞實なる姿と之れに至る道を平易簡明に説き明かした絶好の信仰入門書。

藤井實應著

一枚起請文

B五半截 十六頁
一部 七圓

浄土宗布教の第一線に活躍されている筆者が、特に本會のために、宗祖信仰の實質を從來の型を脱して新しい思想と深い信仰の上から、懇切に指し示めされた、念佛信仰者必讀の小冊子。

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

大正大學教授

佐藤密雄著

お盆とおぜがき

B五半截 八頁
一部 四圓

現在佛教の生きた習俗として重要な意味を持つお盆と施餓鬼の意義と行事を、一般知識人のため、筆者の印度佛教學の造詣を驅使して書き下ろした快心の作。

お盆を間近に控え、教勢擴張、法城護持の紙の彈丸として、右三著を充分に御利用下さるようお願い申し上げます。

送料九部以下六圓十部以上十二圓、十部増毎に六圓増、但し五十部以上、五〇〇キロメートル以内三十圓、千キロメートル以内四十五圓、千キロメートル以上五十五圓、百部以上本會負擔

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番